

ゴルビー

育成者：植原宣紘

育成地：山梨県甲府市善光寺1丁目12

来歴：「レッドクイーン」と「伊豆錦」の交雑実生

番2号（植原葡萄研究所）

特性

■栽培特性

本種は赤い「ピオーネ」といった品種で栽培特性も「ピオーネ」とよく似ている。樹勢は著しく旺盛であり、特に若木の期間は新梢が徒長的な生育をするため、花振るいが甚だしい。「ピオーネ」と同じジベレリン処理（満開時：25ppm＋フルメット2ppm混用処理、満開後20日頃：25ppm処理）により無核化することができ、同時に花振るいが回避され、粒揃いの良い果房が得られる。

新梢管理は「ピオーネ」に準じて行えばよい。果房の管理は、開花直前に房の切り詰めを徹底し、早期に粒数を20～25粒以内に制限する厳しい摘粒により、房の形状の揃いをよくし、着色を均一にする。

■果実特性

果房は「ピオーネ」よりやや小さく350～400gにする。果粒は円形～短楕円形であり、ジベレリン処理により無核化した場合、大きさは平均33mm×32mm、果粒重は平均18g（16～20g）程度であるが、最大25～30gに達するものも見られる。果皮は鮮紅色で、果粉は厚く、スリップスキンではないが剥きやすい。糖度は20～21度と高く、食味も優れている。肉質は締まり「ピオーネ」並みである。裂果はほとんどない。

成熟期は育成地（山梨県甲府市）において、8月中～下旬である。

■病虫害抵抗性および栽培上の留意点

病虫害に対しては「ピオーネ」と大差ない。したがって、病虫害防除は「ピオーネ」に準じた対策を講ずることで問題はない。

本種は果皮が鮮紅色で糖度が高いため、着色期間が長引けば傷みが生じる危険性がある。また、夜蛾、蜂害や、摘粒不足の物理的圧力による裂果など、大粒のため一粒抜けても商品価値を落すので、徹底した収量制限と、着色を良好にするため、棚の均一な明るさを保つ新梢管理が重要である。

若木の期間は、樹冠の拡大と弱剪定によって徒長を抑える。樹形を整えた成木期に達したならば短梢剪定でも自然形整枝の長梢剪定でも可能である。

房作りは、花穂の尻を摘まず、花穂の尻3～3.5cmを残す。果房は着色を均一にするため、350g程度の小房を目標とし、20～25粒以内にすることが望ましい。

裂果はほとんどないが、栽培管理では窒素過多や灌水の過多には十分注意する。

■地域適応性

果皮の着色が良好な地域が産地の条件である。育成地（山梨県甲府市）においては着色期の夜温が25℃以上に達し、昼温も40℃近くになるが、着色に問題はない。これ以上の気温に恵まれた地域は多いと思われるので、地域適応性は広いと考えられる。

（植原宣紘）